

2019.2.1

東洋英和女学院

中学部長 石澤友康

2019 年度入学審査A日程において、以下の問題文の訂正を行いました。

受験生をはじめ保護者の方々、その他の関係者の皆様にはご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

(1) の誤字は解答するうえで影響がないと判断し採点での考慮はいたしません。

(2) は試験時間内に受験生に訂正を指示しました。

【問題文の訂正箇所】

(1) A日程 国語：1 枚目 問題文下段 26 行目

<誤>

するとバンさんは推之君のパレットに手を伸ばしてきた。

<正>

するとバンさんは雅之君のパレットに手を伸ばしてきた。

(2) A日程 理科：2 枚目 (3) の 2 行目 および 5 枚目 (3) の 2 行目

<誤>

①、②に答えなさい。

<正>

①、②、③に答えなさい

以上



次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問十一以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問十一の答えは、**国語五**の解答らんに書きなさい。字数が示してある問題は、句読点も一字と数えます。

(二)までのあらすじ)

中学三年生の雅之君は、台風から二日後のある日、河川敷に住む知り合いのバンさんが気になり、多摩川を訪れる。中二の頃、多摩川の河川敷で絵を描いている時に雅之君はバンさんと出会った。それ以来、雅之君は何度もバンさんのところに足を運び、様々なアドバイスをもらっていた。その当時のことを雅之君は思い出している。

ブルーシートの掘つ建て小屋の前で、バンさんは空き缶をつぶしていた。缶に板を乗せ、それを踏んでつぶす作業だった。

「バンさんは雅之君にすぐ気づいた。手招きをして、「おい」と声をかけてきた。そしてまわりのホームレスの人たちに「友達だ」と紹介し、顔を見せて笑った。

「いいところにきたな。今日はおもしろいものがあるぞ」

バンさんは空き缶から離れると、小屋の奥から透明なボウルを取り出してきた。

「今日は優雅な気分になろうと思ってたんだよ」

ボウルには水が張られ、何匹かの小魚、クチボソやハヤが泳いでいた。他のホームレスの人たちは「またそれか」と笑っていた。

「見てみな」

バンさんはボウルを持ち上げ、雅之君の頭上に掲げた。光がボウルのなかでゆらゆら揺れ、魚たちはそのきらめきからむようにして泳いでいた。雅之君が初めて見る魚の姿がそこにあった。胸びれや腹びれが小刻みに動き、虹を放っている。

「魚は普通、真横かなめ上からしか描かないだろう。俺たち人間が普段そうやって見ているからだ。でも、川底に目があればこんなふうに見える。角度を変えるのもひとつの工夫なんだよ。絵の技術はあるようだから、こういうのを細密画でやってみな。だれも見たことのない水の世界になる」

「すごいねえ、バンさん。さすが元イラストレーターだ。」

ホームレスの人たちからあがった声を雅之君は覚えていた。雅之君も同じように「すごいねえ」と思った。あの瞬間、雅之君は2. 当たり前の世界のなかに、見知らぬ世界が内包されていることを知ったのだ。

橋が雅之君の視界に入ってきた。でも、足はなかなか前に進まない。また泥溜まりと流れを往復し、魚を戻しに行く。

本当は橋の下を見るのがこわいかもしれない。だからわざわざこんなことをしているのではないか。いや、親との約束を破ろうとしていることで、びびっているのかも。

自身にそう問いかけると、どれもこれも図星のような気がしてくる。雅之君はゆるゆると立ち止まった。

「あ、ここ……」

大量の灌木やビニール片を引っかけたまま、ななめにかしいで立っている一本のポプラがあった。

雅之君はこの木のすぐそばで、ヒルガオの群落を描こうと画用紙に

向かっていたことがある。ほんの数ヶ月前、梅雨にもかかわらず「a」空となった日曜日の屋下がりだった。

「b」に伸びたヒルガオのつるは茂みをおおうように巻いていて、たくさん真珠色の花をつけていた。

実はその時、雅之君は画板をかかえながらも絵が描けないでいた。ヒルガオの花が純粋な白ではないということはわかってはいたが、限りなく白に近いそのかがやきを市販の絵の具でどう作っていくのか、その一点にこだわるあまり、前に進めなくなっていたのだ。白をベールに暖色系をわずかずつ混ぜてみたが、紙にのせると明らかに違う色になってしまった。どうしたものだろうと絵の具を見比べているうち、「おい」と声がかかった。

「相変わらず一人か？」

雅之君はあごを突き出すようなあいさつをし、「日曜日だから」と言い返した。

「お、そうか」

バンさんは笑いながら雅之君の横にきて、「なにを描いてるんだ？」とのぞきこんだ。

雅之君は正直に答えた。目の前のヒルガオを描こうとしていることでも、花びらの色が出せそうにないこと。

バンさんは「ほう」とうなずき、しばらく雅之君のすることを見ていた。ひげだらけの口が動いたのはそのあとだった。

「同じ色にしくたつていいんじゃないか」

「はあ……でも」

「絵なんだから」

「色を作れないのがくやしいんですよ」

するとバンさんは推之君のパレットに手を伸ばしてきた。

「混ぜるものがちがうんだよ。別に、絵の具じゃなくなつていいんだ」

「え？」

雅之君は絵筆とパレットをバンさんに渡した。いつも通りのごつごつとした汚れた手でバンさんは受け取った。

バンさんはヒルガオの群落のところまで歩いていき、数枚の葉をちぎって戻ってきた。指先でそれをつぶし、緑の草汁を白い絵の具に何滴か垂らした。そして筆先でぐるぐると混ぜていった。

「これで描いてごらん。おそらくこつちの色だから」

思いもよらなかったこの色作りを、雅之君は口を開けたまま見ていた。こんな方法があるなんてまったく知らなかった。そして閉まらないうその口からは、さらに「わっ」と声が出るようになった。画用紙に筆をつけたとたん、望んでいた色がそこに現れたからだ。

「すごい」

「絵の具だからって、他の絵の具と混ぜなければいけないなんて考えたらだめだぞ。お茶を混ぜることもあれば、石の粉を使う時もある。なんだってありだよ。方法は自分で開拓していくんだ」

3. すごい、すごい、すごい、とくり返す雅之君の横で、バンさんは草むらにじかに腰を降ろした。あくびをしながら雅之君の描く絵を見ている。そしてごろりと横になった。陽ざしが心地よかったのか、バンさんはそのうち寝息を立て始めた。こんなところでバンさん……と雅之君はとまどったが、絵を描くのじやまになるわけでもないで、そのまま放っておいた。

どれだけ時間がたったのだろう。雅之君はヒルガオを描くことに没頭して、バンさんがとなりで昼寝をしていることを忘れていた。

「たかちゃん……」
唐突な声だった。

雅之君の絵筆がとまった。振り向くと、自分の手を枕代わりに寝入ったバンさんはもう一度、「たかちゃん」と発した。

閉じられているバンさんのまぶたが、夢を見ているように動いていた。
4 雅之君は首筋や耳が熱くなり、バンさんから顔をそむけた。絵の具がぼたぼたとスポンに落ちた。バンさんの声は続く。

「たかちゃん、ここにいるから」

どうしたらいいかわからず、雅之君は立ち上がろうとした。すると、はつ、と息を吸いこむような音に続き、バンさんがせきばらいをした。

なにも気づいていないふりをして、雅之君は折りたたみすに座り直した。絵の具を筆につけ、再びスケッチブックに向かう。

バンさんはしばらくにも言わなかった。何度かあくびをし、雅之君のとなりでただじっとしていた。それからおもむろに「うまいなあ」とつぶやいた。

「なにが？」

「いや、君の絵だ」

「でも……」

なにか言われる予感がし、雅之君は振り向かなかった。

「そう。でも、なんだよな。うまいんだが、やっぱり見たままの絵だ。

そういう方向でやっていくなら、それはそれでいい。だけど、うまい絵ということだけで競うなら、上には上がいる。世の中には写真と見まがうような絵を描く人がいるからな。どうだ？ この道で食っていくかと思ってるのか？」

さあ、と雅之君は首をひねった。それを考えないわけではなかったが、まだなんとも、というのが本音だった。

「まあ、そんなに早く人生を決める必要もないんだけどな。ただ、君の絵は5 まっとう過ぎる。責任感が強過ぎるのかな。その分、視野がせまくなってる」

はあ、と雅之君。

「植物ってのは、こういう生き物なんだぞ。知ってたか？」

バンさんはよろよろと立ち上がると、ヒルガオの群落の横の茂みまで歩いていき、すこし迷ってから背丈のある雑草を引きぬいた。川砂の下からずるずると長い根が出てきた。

「地下で頑張っている足腰の方が大きいだろう。それなのに絵描きは、いつも上半分しか描かない。もし君が見たままを再現する絵描きになりたいのなら、一度根まできちんと細密画でやってみな。それはそれで目が新しくなる。そうやって自分のスタイルつてものを探す旅に出るんだよ」

バンさんはそれだけを言うと、何度か背伸びをして「うおーっ」と意味のわからないうなり方をした。それから空き缶でふくらんだ袋を肩にかついだ。

「楽しんでな。なにごとよ」

雅之君が「はい」と答えると、バンさんは鼻歌でメロディらしきものをなぞりながら遊歩道の方へと歩いていった。雅之君は小さな声で「どうも」とささやき、去っていくバンさんの背中に向けてべこりと頭を下げた。

雅之君の足下に、バンさんのぬいた雑草が残された。

ヒルガオの花びらはどうでもよくなっていた。雅之君のなかで、植

物そのものの印象が変わっていた。これまで自分が強調しようとしていた植物の可憐さはどこかに消え、生き物としてのなまなましい存在感が生まれてきた。草の根の形なんて知っていたはずなのに、それは初めて見る生き物だった。まるでこの星にひそんで生きるため、姿を変えた宇宙生命体のようにも感じられるのだ。

新鮮だった。意図的にまっ白なフォルムにしてもいいから、6 雅之君はこの感じ、この方向で植物をとらえ直してみようと思った。細密画でありながらイメージを優先する、新たな感覚の萌芽。

わずかな水溜まりのなかで、ザリガニが泥の輪を作った。まわりは干上がっている。雅之君はザリガニのしっぽをつかんでバケツに入ると、また流れまで運んでいった。すると途中で深い泥にはまり、制服のスポンを汚した。泥だらけのバスケットシューズは自分で洗うつもりだったが、スポンは自信がなかった。母親がぶち切れた時の、半ば悲鳴のような声を雅之君は覚悟した。

バンさんに会わなくなったのも、母親のその声がきつかけだった。橋の下にいる雅之君を偶然見かけたという近所の人から、ごていねいにも電話がかかってきたらしい。母親は問い詰めてきた。しばしの沈黙のあと、雅之君は答えた。ホームレスのバンさんと空き缶をつぶしていたと。

迷いはあったが、雅之君が正直なことを言ったのには理由があった。教室でも美術部でも、雅之君が一人浮いていることを母親は**常々**心配し、口にした。だから、親しい人ができた、安心していいよという意味で言ったのだ。しかし母親は「なぜあんな人たちと！」とさげし、そのまま顔をおおって泣きだしてしまった。

「なんで？ 自分がなにをやっているのかわかっているの？」

雅之君はうろたえた。ホームレスにいい感情を持つていない人たちがいることを雅之君は知っていた。雅之君だって、バンさんと初めて言葉をかわした時はこわかったし、緊張した。でも、ここまでの反応を見せる母親が雅之君には理解できなかった。まるで犯罪者呼ばわりだった。バンさんときき合っていると自分が自分でも、母親は許さないと目で見ると色で見るのだった。

「だって、絵も教えてもらったし」

「なんでホームレスに絵を教えるもらうのよ！ なんのために美術部に入っているの？ どうしてなにかかもそうなの！」

母親の顔は、憤りでゆがっていた。

「だいたい、なんでいっしょに缶をつぶしているわけ？」

どう答えればいいのか、雅之君は言葉が浮かんでこなかった。ただ、バンさんを訪ねていった時に、みんなが缶をつぶしていた。だから手伝ったとしか言いようがなかった。

「缶がたくさんあったから。手伝おうと思って」

「そういうの、偽善っていうのよ」

「だって……」

「ああいう人たを助けようとか、どうしようとか、そんな運動やって社会にたてつくような人間にならないでちょうだいよ。もう、信じられないわよ。学校で友達もできないくせに。ばかにされてくるくせに！」
母親は自分の言葉に興奮したのかまた泣きだし、そのままテーブルにつつぶした。雅之君も涙がこぼれて仕方なかった。7 実の母親だけに、テーブルの向こうとこちら側の、その途方もない距離感に息がつまりそうになった。

母親は帰宅した父親にもまぐし立てた。父親は難しい顔でビールを

のみ、雅之君をそばに座らせた。父親は母親のように取り乱しはしなかったが、逆にひとつひとつの言葉を重そうに放った。雅之君はまたうなだれることになった。

「人として、こういう見方が間違っているのは、お父さんにもわかるよ」

父親はそういう前置きをした。

「こんな時代だから、生きてりやいろいろある。ホームレスになつてしまふ人もいるだろう。でも、はつきり言おう。一生懸命まじめに働いていれば、人はホームレスなんかにはならない。これは事実だ。どこかであの人たちには**ユダン**というか、怠惰な時期があつたんだらう。もちろん、だからといってあの人たちを見殺しにするような国ではないけどね」

そんなふうには言つてほしくないと雅之君は思った。植物の根といつしよだった。見えない人には見えない。でも、自分には見えていると思つた。

「あの人たちが盗みを働いているといううわさもある。やむにやまれずの場合もあるだろう。お父さんだつて同情はするよ。でも、お前には一切関係ないことだ。お前は学校にも塾にも行っているんだから、まずそこで友達を作れ。その方がいい。だからあの人たちには今後一切近づくな」

父親はそう言つて約束をせまつた。雅之君は無言で下を向いていた。なにか言い返そうとすると、母親のように泣きだしそうだった。自分のことを悪く言われるより、空き缶を集めるしか生活の糧がないバンさんたちが、犯罪者呼ばわりされていることがたまらなくいやだった。でも、それを訴える言葉が雅之君にはなかった。どうにもならず、雅之君は父親の顔を見た。

「なんだ、その目は」

父親の声が大きくなった。雅之君はまた下を向いた。

「約束できないなら、お父さんの方からその人に言いに行かないといけないな。あるいは警察に相談するか」

警察？

父親はいったいなにを考えているのだろうと雅之君は思った。

だが結局、雅之君は父親の圧力に折れたのだった。力なくうなずき、「もう会いません」と小さな声で答えた。

どこから流れてきたのか、軽自動車がひっくりかえつていた。フロントガラスが割れ、運転席にまで泥が堆積していた。

雅之君は軽自動車のなかをのぞき、それから橋の方を見た。

この水の力。大気のエネルギー。濁流は土手ぎりぎりまできたのだから、橋の下にブルーシートの小屋が残っているはずもなかった。バンさんたちもきつとどこかに避難したに違いない。それでも、もしまたこのあたりにバンさんたちが戻ってきているとすれば、雅之君が考えつく場所は橋の下しかなかった。

泥を踏みながら、雅之君は一步步橋に近づいていく。

親と約束した以上、あれ以来河川敷には足を踏み入れていない。それは雅之君にとって大きな我慢だった。そしてその分だけ、**8** 雅之君は憑かれたように絵を描き続けていた。

受験勉強で目の色を変える同級生が多いなか、雅之君は美術部の部屋で夏休みの大半を過ごした。家にいるより平和だったし、絵に向かうことでささくれ立っている自分から目をそむけることができた。

雅之君は、バンさんに教えてもらったものの見方を、技術として具体化することに熱中していた。その方向性のみを自分の**シンシン**にし、作品を描き続けた。校庭のすみの植えこみから雑草を引きぬいてきては絵筆をにぎった。大胆に描かれた根が躍り、花や葉を脇に押しやった。だれが見ても新しい印象を受ける植物たちの姿がそこにあった。

美術部員たちの間でも雅之君の作品は徐々に評判になつていった。普段は押しだまつている雅之君だけに、その絵を囲むみんなの声はかえつて大きくなった。男子女子ともに「すごいね」と集まつてくる。顧問の先生も熱を**オ**びた口調になった。

「理科の資料図みたいだけれど、描く側の目で生まれ変わっている。こりや、アートだ。おい、雅之、どこで思いついた？」

バンさんとの間で起きたことを話そうとは思わなかった。話せば興味本位でいろいろきかれるに決まつている。雅之君は笑みを浮かべながらも、新たに得た「目」についてはなにも語らなかつた。

ただ、孤立しがちだった雅之君にとって、周囲のこの変化はとても大きな意味を持ち始めた。**9** 日々の色合いが絵の具を並べたようにあざやかになつていった。生涯をこの道にかけてもいいと雅之君は初めて思つた。顧問の先生は雅之君の作品を何枚か選び、コンクールに送つた。雅之君の胸のなかには、いつの間にか夜明けの金星みたいなかがやきが宿るようになった。もうこうなつたら、親がなにを言おうとバンさんにまた絵を見せに行こうと思つた。

そこに突然の濁流をぶつけてきたのが今回の台風だった。十年に一度の大型台風だとテレビは報じていた。多摩川の土手沿いには消防車が並び、警戒水位を越えた場合は強制避難もあり得るとくり返しアナウンスしていた。

そして、警告された通りの大型台風がやってきた。激しい雨が半日も降り続き、家が揺れるほどの風が吹き荒れた。まさか逃げ遅れていることはないと思つたが、雅之君はバンさんたちの**安否**を気づかつた。暴れ狂う風の音を聞きながら、**10** 雅之君はまんじりともできない夜を過ごした。

台風が去り、天高い青空が現れても、**11** 雅之君の胸のなかにはまだ強い風が吹いていた。橋の下がどうなっているのかとても心配だった。あの場所だけでも見に行こうと雅之君は思つた。親の顔がちらついたが、とにかくそれは自分で決めたことだった。

そんななか、ちょうど給食の時間にそれは起きた。美術部の顧問の先生が「金賞！ 金賞！」とさけびながら教室に駆けこんできた。なにごとかと担任の教師は立ち上がった。教室もざわめいた。すると顧問は、雅之君の絵がコンクールで一位を取つたこと、副賞としてパリに短期留学できる資格を得たことなどを興奮**サ**めやらぬ口調で語つた。教室のすべての生徒が立ち上がり、一人離れて座つていた雅之君に拍手を送つた。

(ドリアン助川「台風のとて」『多摩川物語』より)

【注】

1 デフォルメ・・・変形すること。

2 萌芽・・・物事の始まり。



問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 バンさんは雅之君にすぐ気づいた。手招きをして、「おい」と声をかけてきた。そしてまわりのホームレスの人たちに「友達だ」と紹介し、歯を見せて笑った。とありますが、ここからバンさんはどのような人柄だとわかりますか。あてはまるものを次のア～エの中から二つ、選び記号で答えなさい。

- ア 口べたで誠実な人柄。 イ 不まじめでだらしない人柄。 ウ 器用でねばり強い人柄。
エ 率直でおおらかな人柄。 オ 強引で勝手な人柄。 カ わけへだてのない気さくな人柄。

問三 2 当たり前の世界のなかに、見知らぬ世界が内包されていることを知ったのだ。とありますが、これはどういうことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ、選び記号で答えなさい。

- ア 魚の入ったボウルを頭上にかかげて角度を変えて見ることで、だれも見たことのない新しい視点を得られたということ。
イ 日用の食器であるボウルに魚を泳がせて見ることで、今までに感じたことがないような優雅な気分に分れたということ。
ウ ふだん使っている絵の技術の中に細密画という方法を取り入れることで、だれも見たことのない水の世界を描けたということ。
エ 日常生活の中で見られた河川敷の風景の中に、実はホームレスの人たち同士の親しい生活があるのだと気づいたということ。

問四 空らん「a」「b」にもっともよくあてはまる表現を、次のア～エの中から一つ、選び記号で答えなさい。

- a・・・ア むしむしとした イ どんよりとした ウ めけるような エ さびしそうな
b・・・ア 有象無象 イ 縦横無尽 ウ 枝葉末節 エ 空前絶後

問五 3 すごいよ、すごい、すごい。とありますが、雅之君はどのようなことに対してこのように言っているのですか。あてはまるものを次のア～エの中から二つ、選び記号で答えなさい。

- ア バンさんが写真と見まがうような絵を描く方法を教えてくれて、それがとても望みどおりであったこと。
イ バンさんが雅之君の知らなかった色の作り方を教えてくれて、それがとても適切であったこと。
ウ 雅之君は人から教わるのがあたりまえだと思っていたのに、バンさんは方法で開拓するものだと言ったこと。
エ バンさんのイラストレーターとしての腕に感動しているのに、バンさんはわざと気づかないふりをしていること。
オ バンさんが雅之君の思いこみを予想もしない方法を示すことでくずし、それがとてもみごとであったこと。

問六 4 雅之君は首筋や耳が熱くなり、バンさんから顔をそむけた。とありますが、ここから雅之君のどのような気持ちがわかりますか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ、選び記号で答えなさい。

- ア バンさんの言葉をそれ以上聞かないほうがいいと思い、あわてて落ち着きを失っている。
イ 自分は雅之という名前なのに、「たかちゃん」と間違えて呼ばれて気を悪くしている。
ウ バンさんのちよつとした言葉くらいで気を散らした自分をはずかしく思っている。
エ バンさんがとつぜん意味のわからないことを言い出したので不気味に感じている。

問七 5 まっとう過ぎる。とありますが、どのような点を「まっとう過ぎる」と言っているのですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ、選び記号で答えなさい。

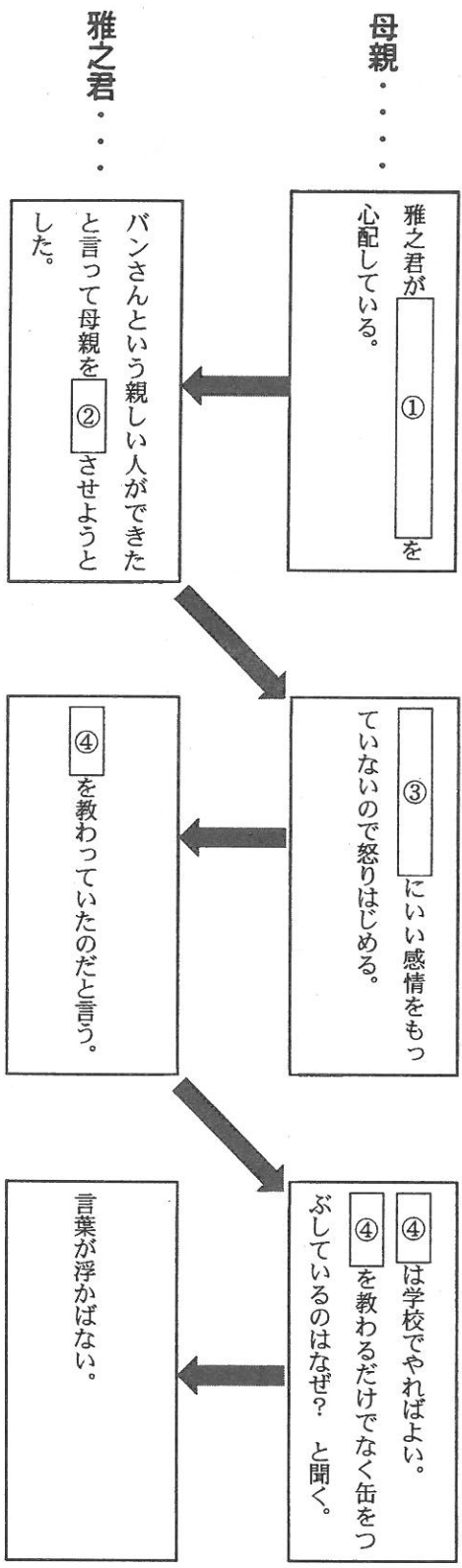
- ア お手本の絵をまねし過ぎる点。 イ 自分のスタイルにこだわり過ぎる点。
ウ 他人の評価を気にし過ぎる点。 エ 見たままを描こうとし過ぎる点。

問八 6 雅之君はこの感じ、この方向で植物をとらえ直してみようと思った。とありますが、「この感じ、この方向で植物をとらえ直してみようと思った」とはどういうことですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から二つ選び記号で答えなさい。

- ア 見える部分を描かずに、見えない部分を自分で想像して描いてみようと思った。
 イ この道で食っていくために、バンさんの言うとおりに絵を描く楽しさを表現しようと思った。
 ウ 観察したままを描くのではなく、植物の本来の生命力を自分なりに表現しようと思った。
 エ 細密画を描くのではなく、印象に残った部分だけを強調して描こうと思った。

問九 7 実の母親だけに、テーブルの向こうとこちら側の、その途方もない距離感に息がつまりそうになった。とありますが、

(1) 距離感を持つまでのいきさつを次のような図にまとめました。①～④にあてはまる言葉を、本文中からそのままぬき出して答えなさい。



(2) 「実の母親だけに」と特に強調しているのはなぜですか。四十字以内で書きなさい。

問十 8 雅之君は憑かれたように絵を描き続けていた。とありますが、なぜ「憑かれたように絵を描き続けていた」のですか。あてはまるものを次のア～エの中から二つ選び記号で答えなさい。

- ア 自分の作品が徐々に評判になるにつれて、周りの期待にこたえようと必死になっていたから。
 イ パリへの短期留学をめざし、よいいなことを考えず、技術を身につけたいと考えていたから。
 ウ 自分を無視する同級生たちをおどろかして見返してやるようすばらしい絵を描きたいと思ったから。
 エ バンさんのアドバイスにしたがって絵を描くことで、植物の生き物としての存在感を表現したかったから。
 オ 両親にバンさんと会うことを禁じられて、会えないつらさを、絵を描くことでまぎらわそうとしていたから。

問十一 9 雅之君は、日々の色合いが絵の具を並べたようにあざやかになっていた。経験をしました。あなたの中で同じような経験をしたことを思い出して具体的に書きなさい。どのようなことをきっかけとしたのがわかるように書くこと。



問十二 10 雅之君はまんじりともできない夜を過ごしたとありますが、この時の雅之君の心情にもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 腹がすわる イ 胸を痛める ウ 目に余る エ ふに落ちない

問十三 11 雅之君の胸のなかにはまだ強い風が吹いていたとありますが、これは雅之君のどのような気持ちのたとえですか。「く気持ち。」につながるように、自分の言葉で二十五字以内で答えなさい。

(二十五字) 気持ち。

問十四 起きた順番に、出来事を次のように並べました。(1 () () 3 () にあてはまるものを後のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。同じ記号は一度しか使えません。

・バンさんと出会う。

・バンさんからアドバイスをもらう。

・(1)

・生涯を絵にかけようと思う。

・(2)

・(3)

・あれはてた河川敷へ行く。

- ア 台風が来る。
イ 親と約束をする。
ウ バンさんがけがをする。
エ コンクールで金賞をとる。
オ 父親がバンさんに会いに行く。

常常

ユダン

シシン

オ

びた

問一

安否

サ

めやらぬ

問二

問三

問四
a

b

問五

問六

問七

問八

問九 (1)

母親・・・

①

雅之君・・・

②

③

④

(2)

40

問十三

25

問十

問十一 答えは 国語一五 の解答らんに書きなさい。

問十二

問十四
1

2

3

気持ち。